

# Una casa junto al Tragadero

タイトル底なし川のほとりの家 Una casa junto al Tragadero

著者 マリアノ・キロス Mariano Quirós

出版社 トゥスケッツ (バルセロナ) Tusquets Editores S.A.

出版年 201年

ページ数 23頁

読者対象 一般

レポート作成 白川貴子

## 概要

アルゼンチン北部の自然豊かなグランチャコを舞台に繰り広げられる、大地に生きる人間を描く小説。都会を捨て、原野の奥地に移り住んできた男は、人間とかかわる煩わしさからだれとも口を利かない。足に吸いつき人も動物も呑み込んでしまう 底なし川 のほとりに住み、拾ってきた野良犬だけを相棒に、不敵な野生児のように暮らしている。家には幽霊が出るし、変わり者の隣人や自然保護協会の役人たちに悩まされるし、ときには命の危険にもさらされるのだが、環境に慣れるにしたがい、ここでの暮らしも悪くないと思うようになってくる。

## あらすじ

### サル的一件

犬のインディアが吠えたので引き金を引いてしまい、サルを撃ち落としてしまった。その衝撃でひどく肩を痛めた。死んだサルを調べていると、ソリアの息子が木立の陰から見つめていた。父親であるソリアに告げ口するのだろう。ソリアが何度か自然保護協会の連中をここまで案内してきて、連中からはサルを撃ってはならないと説教をされてきた。最初は無視していたが、さすがにこの一年ほどは自粛していたというのに。しかたがない、スープにして食おうと思っていると、対岸から車の音と音楽が聞こえてきた。

### 家を手に入れる

間に慣れるまでがつかった。よく都会からここまできては、あたりを散策していたので、家の目星はついていて。ライトバンを停めてかなり歩いたところにある廃屋で、ひどい状態ながら造りがしっかりしていたのだ。ある日思い切って中に入ると、悪臭がし、虫の大群が飛んでいた。途中でドアが閉まってしまい、真っ暗闇に閉じ込められた。人がいる気配がしたので恐ろしさのあまりにすくみあがり、そのうちに眠ってしまった。それがこの家での最初の晩だった。

### 来客

対岸にやってきたのは男三人と女二人のグループらしかった。カイセド家の空き家に入ったところをみると、一家の息子が娘が案内してきたのかもしれない。週末になると町から出かけてくるカイセド家は、子供たちを遊ばせて夫婦は戸外で用事をし、そのうちに夫が妻を呼んで夫婦の営みをする習慣になっていたのだ。小柄で魅力的な奥さんを物かげから眺めるのが、密かな楽しみになっていた。そうして覗いていると、向こう側の木陰から見ていた子供たちと目が合ったこともあった。いつからか一家は顔を見せなくなった。こちら側の岸から眺めていると、若者の一行は車からケーブルを引いて電気を灯し、ビールなどを運び下ろしていた。

### 老女

朝になると、泥酔したように椅子で眠りこけている老婆が見えた。侵入したことを詫びようと口を開きかけたとき、ずっと前から死んでいるのだと気がつき、泡をくって外へ走り出た。地面に寝転がって考えるうちに気持ちが落ち着いたので、とって返すと、鼻をつまんで死体の下に毛布を広げ、箒でつついてそこに転がすことにした。それから毛布を引いて外に引きずり出し、ずるずる川まで引っ張っていき、川底の泥に足をとられながら、死体を川に沈め、苦勞してまた岸に戻った。岸辺で休んでいるときに物音がしたのでふり返ると、ソリアがこっちを見ていた

。ソリアは近づいてくると無言で川を見つめ、黙って木立の中に消えた。

### 対岸から

肩の痛みを我慢しながら、川べりまで出て向こう岸の連中を観察した。ダイニングテーブルを運び出してバーベキューを始め、小太りの男をみんなで笑っていた。音楽が止み、カエルとコオロギの声しかないところへ、インディアが吠え、一行を驚かせた。泥団子を投げつけてやろうとしたのだが、肩に激痛が走ったせいで思わず声を上げてしまい、向こう側からだれだ、という怒声とともに空き瓶が次々に飛んできた。そのうちに犬と一緒に眠り込んでしまい、目を覚ますと、眠り込んでいるカップルといちゃついているカップルが見えた。太っちょは一人で静かに泣いていた。太っちょ以外の連中にわけのわからない憎しみを覚えた。

### インスーアとライトバン

川から戻ると窓を開け放って悪臭を飛ばし、車で村の雑貨屋を目指した。コロニアでただ一件の雑貨屋をやっているインスーアに、「自分のライトバンを譲るから、商品と交換してもらいたい」と紙に書いて渡した。盗難車だったただではすまないぞと言いながら、インスーアは掃除用具や服などをそろえ、死んだかみさんのものだったと言って、手押し車代わりの車輪がついた椅子も用意してくれた。

### 太っちょ

川に渡された綱を引きながら対岸に渡る丸太船に乗り、向こう岸に移った。太っちょは見えなかったが、他の四人はぐっすり眠り込んでいる。ずっしり重いカメラを手にとり、シャッターを押して楽しんでから、ナイフとフォークでバーベキューの残りを平らげた。それから車のケーブルを切断して電気を消してやった。テーブルにあった携帯電話や飲み物を袋に入れ、帰ろうとしたときに、暗闇の中で何かが動く気配がし、とっさに押しのけた。太っちょがグリルの上に投げ出された。起き上がってきたところを殴りつけると、死んでしまったように見えたので、再び真っ暗な川を渡り、家に逃げ戻った。

### ソリアの母親

家で死んでいた老女は、コロニアでは魔女と呼ばれていたことをインスーアに教えられた。ソリアの母で、ソリアも彼女を恐れていたようだ。話したくないだけだとは夢にも思っていないインスーアに、口が利けない男と呼ばれることになった。不愉快だったがそのうちにそれも悪くないと思うようになった。家の悪臭が抜けるまで一週間ほどかかった。二日目の晩、川べりでまどろんでいたときに、家の中で何かが動いているように見えた。正直、家が恐かった。外に座って酒を飲み、ほろ酔い気分になってから家に入るようにしていたのだが、何度か老婆と鉢合わせたこともあった。もぐもぐ口を動かし、掃除でもしているように部屋を歩き来していた。近寄って来るたびに逃げているが、そのうちに靈魂がさまよっているのだとわかり、川に捨てたりして悪かったと声に出さずに呪文のように唱えて詫びた。

### 後ろ向きに

カイセド家から持ち帰ってきたファイルを読み、一行の名前を知った。男性二人は自然保護協会の研究者たちで、太っちょはジャーナリストとして参加していたらしい。女性のひとは学生、もうひとは素性がわからなかった。家に戻り、マリファナたばこをふかしていると、老婆が後ろ向きに歩いているのが見えた。危害は加えてこないが、犬のインディアはいつでも狂ったように吠え立てる。老婆を避けてダイニングで寝たが、インディアの尋常でない吠え声で目を覚まし、外に出てみると、何十メートルか先に、太っちょが何かを探すようにしながらうろついているのが目に入った。それも、老婆と同じように後ろ向きになって、恐ろしさのあまりに後ずさりし、家に逃げ込んだ。

### 底なし川トラガデーロ

川がトラガデーロ（吸い込み口）と呼ばれているのは、川底の泥にはまり、人も動物ものみ込まれてしまうからだった。ライトバンとの交換だった買い物の資金が尽きると、インスーアは何を狩ればいいのかを私に教えて、雄鶏と雌鶏を分けてくれた。グランチャコで父や祖父が使っていたという猟銃まで譲ってくれたのだった。

### 雑念

インディアを小脇に抱え、猟銃と袋を持って横手の窓から家を抜け出し、太っちょの幽霊から逃げた。じゅうぶん離れたところでインディアを下ろし、一息ついていると、ソリアが現れ、したたかに殴られた。それから後ろ手に縛られ、川へと引き立てられたところで、こいつをどうすればいいか教えてくれと、ソリアが大声で向こう岸

に呼びかけた。

### 湿原のインスーア

インスーアは釣りに出ているときに、馬に乗った男たち四人と出会い、素手でワニを捕獲する勝負をするから審判をしてもらいたいと頼まれた。逆らえずに船をこいでついていくと、男のひとりが馬を下りて川に入り、羽交い締めにしてワニを捕まえた。お前の番だと言われた若い男は、ワニに腕をかみつかれてしまう。男たちは帰っていったが、インスーアはお礼にワニの卵ふたつを渡された。

### 考える時間

結論を出そうとしない向こう岸の男女にしびれを切らしたソリアは、息子を対岸に送り、渡し船でふたりを連れてこさせた。だが途中で古くなっていた綱が干切れてしまい、女性が川に落ちた。ソリアは自分が侵入者を捕まえてやると、一行に約束でもしたに違いない。ワニがゆっくりと丸太船の脇を泳いでいった。女性は浮かんでこなかった。

### ワニたちのこと

インディアは頭が捻じ曲がってついている。肉片を奪い合っていた野犬の片方がもう一頭に噛みついて川で溺死させたのを目撃したことがあったので、あの狂暴な野良犬を殺さなくてはと思っていた。ワニの卵を持ち帰ったインスーアは、卵から生まれたワニを子供同然に育てていた。その後、育ったワニのつがい川に放したので、川にはワニが増え、動物の死骸があがるようになった。狂暴な野犬はその川で頭からワニに噛みつかれてしまったのだった。殺さなくてはと思っていたが、それを見たら可哀想に思い、ワニを殴りつけて助けてやったのだが、それ以来、ワニに噛まれたインディアの頭はあらぬ方向を向いている。

### ロコ

意識が戻り、目を開けると、男たち二人が泳いで川を渡っていた。次に目を開けると、ミゲと呼ばれる男におまえはだれだ、と詰問されていた。答えようとして自分は口が利けないのだと思い出し、言葉を飲みこんだ。次にロコという名のもうひとりが、太っちょをどこにやったのか答えろと迫った。男たちは、なぜいつでもこうしてここから出られなくなってしまうのかと嘆いていた。

### ソリアの息子

ソリアが訪ねてきたのは、ここに住みついてしばらく経った頃だった。かみさんが産気づいてたいへんだ、とドアを開けるなり言った。この男らしい助けの求め方だった。インスーアに頼めと書いたメモを見せたが、文字が読めないのであきらめてついていった。「連れてきてやったから安心しろ」とソリアは励ました。奥さんは死にかけていた。インスーアに来てもらえないかと思い、ソリアの肩に手を置いて待っていると伝えてから外に出たところで、待てよ、家にある手押し車を持ってくれば奥さんを運べると思いついた。家に帰り、椅子の上のものを片づけて喉を潤してから戻ると、奥さんの姿が見えず、ソリアは赤ん坊を抱いていた。入っていくとソリアに蹴られ、出て行けと怒鳴られた。

### 不快感

興奮して狂暴になっていたソリアも、男たちに縛られた。ミゲが泣きながら川に入っていく、ロコがその後を追って連れ戻してきた。「おまえたちの仲間はこの家のいる」ソリアの声がし、また意識が戻ったところを、腕をつかんで立たされた。

### 別れ

店にもこの土地にももう疲れた、とインスーアが言うので、こんなやつは友だちじゃないと腹が立った。いつものようにカイセド夫婦の営みを覗いていると、向こうの木陰からインスーアも見えており、彼がこちらに気がついて笑顔で手を上げたため、反射的に挨拶を返した。釣りの約束で顔をあわせたときには殴ってやるつもりだった。ところがインスーアは泣き笑いを浮かべ、腕を広げて抱きしめてきた。ふたりで明け方近くまで飲み明かし、目を覚ますと、インスーアはもうコロニアを出ていったあとだった。それが彼との別れになった。

### 帰宅

縛られたまま、男たちに引き立てられて家に向かった。稲妻が光り、土砂降りになった。雷が進むべき道を照らし

てくれた。家の近くまで来ると、外で後ろ向きに歩いている 太っちょ が一瞬浮かび上がって見えた。みんなで家に入った。老婆が顔を突き出して来訪者を観察した。次の稲光で、川に落ちた女性の顔が目の前にあった。飛びすさった拍子にだれかにぶつかり、見ると、あの 太っちょ だった。それから記憶がなくなり、目を開けると朝の光に包まれてソリアの息子が仲良くインディアと眠っていた。ほかの連中は消えている。ソリアの息子はあわてて家に帰っていった。平和な光が注ぐこの山奥の暮らしも悪くない気がした。湿った草の上に落ちていた猟銃を拾い上げ、インディアをしたがえて歩いていった。すると、犬が吠えたので引き金を引いてしまい、サルを撃ち落としてしまった。そしてその衝撃でひどく肩を痛めた。

## 著者について

年にもイベロアメリカ新文学フェスティバルで小説『Torrente』が最優秀賞を受賞。さらに2011年には、小説『

回「ローラ・パーマーは死んでいない」文学賞が与えられた。この他にも短編などで複数の文学賞を受賞している。

## 所感・評価

級映画のスラップスティック感に満ちたブラックユーモアもちりばめられている。後ろ向きに歩いてくる幽霊、自分が生きているのかどうかははっきりわからずに生きている者たち。重苦しいテーマがそれほど重く感じられないのは、こうしたシュールな可笑しみに救われているためかもしれない。荒んだディストピアを生き抜いている登場人物たちのしたたかさに、ある種の爽快感すら覚えた。死にそうな目に遭いながら、最後には「ここでの暮らしも悪くない」と主人公は言う。かくて物語は一周して、振り出しに戻るのだ。

## 試訳（冒頭）

脚を枝にかけて果物をほおぼっていたサルに、猟銃を向けて狙いを定めた。引き金を引こうなどとは思わず、ふざけ半分にそうただけだったのが、インディアがそのとき、だしぬけに吠えたのだった。驚いて指が滑り、引き金を引いてしまった。耳をつんざくばかりの銃声が鳴り響いた。

それにつづけて、三つばかりの出来事が起きた。サルが視界から消え去り、インディアがどこかに逃げ込んで、猟銃が猛烈な勢いで肩にはね返ってきたせいで、枯葉の山にもんどりうって倒れてしまった。銃も脇に投げ出された。拾い上げようとして身体をひねると、激痛が走った。いまの衝撃で肩を脱臼したのかもしれない。そう思い、そろそろと動いてみると、また痛みが襲ってきたが、少しは和らいで感じられた。

左腕を支えにして、ぐいと身体を起こした。節々が音を立て、ロバのいななきに似た声が漏れた。あのあたりだろうと見当をつけ、サルが落ちたところへ向かう。インディアがやってくると、ねじ曲がったその頭を脛にこすりつけてきた。かわいそうに、犬はまだ震えていた。

サルは果物を食べていた木から七メートルほど離れたところに落ちていた。銃弾で頭蓋骨を打ち砕かれ、頭がないサルになっていた。その部分に鼻面を突っ込もうとする犬を追い払わなくてはならなかった。痛めていない方の腕でサルを持ち上げ、重さを確かめてみた。スープの出汁にでもなれば上々というところだ。

視線をあげたときだった。二十メートルほど向こうの木立の陰に、ソリアの息子が見えた。半ば木の枝に隠れていたのだから、お化けが出たのかと思った。互いにその場を動かずにしばらく見つめあい、彼は背中を向けると立ち去った。あの男が例によってサルを撃ち落としていたと言って、父親に報告するつもりなのだろう。

Source URL: <http://newspanishbooks.jp/read-report-jp/una-casa-junto-al-tragadero>